

楊南郡先生と日本統治時代の学者群像

笠原政治

日本横浜国立大学名誉教授

楊南郡先生を顕彰する研究会で、このような研究発表の機会を与えてくださったことに深甚なる謝意を表します。本日は、長年にわたる楊先生のご厚誼を思い起こしながら、掲げた題目について鄙見を述べさせていただきます。

1 「台湾調査時代」——伊能嘉矩、鳥居龍蔵、森丑之助

ここ十数年の間に、楊南郡先生が台湾の山地と原住民族に関する日本統治時代の記録や論文、日本人学者の評伝などを次々と中文に翻訳し、その翻訳活動が台湾の読書界で高い評価を得てきたことはよく知られている。中でも、伊能嘉矩 (Ino Kanori, 1867-1925)、鳥居龍蔵 (Torii Ryuzo, 1870-1953)、森丑之助 (Mori Ushinosuke, 1877-1926) という日本統治初期の学者三人の著作を中訳した「台湾調査時代」叢書全五冊は、大きな反響を呼んだ出版物として今でも記憶に新しいところである。

「台湾調査時代」叢書は、「楊南郡譯註」と記されていることから分かるように、必ずしも通常の意味での翻訳書とは言えない。伊能、鳥居、森を「學術探險家」と名付け、三人の人物像、踏査の足跡、學術上の業績などを考証した本格的な評伝がそれぞれの巻頭に掲載されている。また、訳文の随所に付された懇切丁寧な脚註、探検調査の路線図、年譜、著作目録などのどれを見ても、楊先生の手で初めて掘り起こされた事実の多いことに気づかされる。つまり、これらの訳註書は楊先生の独創的な構想に基づいて編集されており、その構想の中に一つ一つの翻訳が位置づけられているのである。解説と訳註が充実しているという点は、「台湾調査時代」五冊の後に出版された『台湾百年花火』、『台湾百年曙光』についても同様と言ってよい。

それらの独創的な訳註書は、楊先生の驚くべき実力を世に知らしめる機縁となった。日文の高度な読解力に加えて、登山や古道の調査、原住民族への取材などを通じて培われた

該博な知識が翻訳全体をしっかりと支えているのである。日本統治時代の古い記録や論文は、楊先生の優れた訳註の作業によって新しい生命を吹き込まれたと言えるだろう。

初期の調査記録などに続けて、楊先生は1930年代に書かれた一連の著作を翻訳した。その時期を代表する学者は、若手では鹿野忠雄 (Kano Tadao, 1906-45)、馬淵東一 (Mabuchi Toichi, 1909-88) などである。日本の元号で言うと、楊先生の視界が「明治」から「昭和」へと広がったことになる。

2 鹿野忠雄と馬淵東一

日本統治時代の原住民族研究は、実地調査という点で三つの時期に大別して考えられる(表1)。第一は伊能、鳥居、森の三人による「学術探検」期、第二が臨時台湾旧慣調査会の活動時期、そして第三は台北帝國大学が創立され、さまざまな分野の専門家が活躍した1930年代の前後である。そのような研究史の流れにおいて、第二期と第三期との間に二十年近い空白状態が続いたことには注意が必要だろう。第一、第二に当たる明治期と第三の昭和期とでは、書かれる著作の質が大きく変わったのである。

表1 日本統治時代の原住民族調査

1896年～ (明治29年)	「学術探検」期の 調査研究	伊能嘉矩、鳥居龍藏、 森丑之助、他
1909年前後 (明治42年)	臨時台湾旧慣調査会の 調査	佐山融吉、小島由道、 他
(一部を除き) 調査研究の空白状態		
1928年～ (昭和3年)	(台北帝國大学創立) 大学等の学者たち による調査	小川尚義、移川子之蔵、 浅井恵倫、金関丈夫、 古野清人、宮本延人、 鹿野忠雄 、岡田謙、 國分直一、 馬淵東一 、 他 (生年順)

明治期の鳥居と森が登山、探検などの記録を好んで公表したのに対して、昭和期の学者たちが書いた著作には概して専門家向けの学術論文が多い。調査にも資料分析にも学問上の厳密な手続きが求められるようになり、「学術」と「探検」は次第に分離していった。楊先生が『台湾百年曙光』で昭和期の著作を翻訳したとき、選び出されたのは、主として記述中心の論文や調査報告、山地の紀行文などであった。先生は山地の跋涉と原住民族の調査とを分かち難く結びつけている。そうした著作の選択は大いに頷けるところだろう。

昭和期に活躍した学者たちの中で、研究の姿勢が鳥居や森に最も近かったのは鹿野である。昆虫採集や登山、自然地理学の調査を繰り返すうちに原住民族の研究に没頭し始めたという経歴が、その行動力に富んだ学問の方法を雄弁に物語っている。楊先生は、アミ（阿美族）のトタイ・ブテン（托泰・布典）と鹿野忠雄という二青年の間に芽生えた友情を美しい文章で描き、多くの読者を魅了した（「興子偕行」）。また、台湾山岳文学の傑作と言われる『山と雲と蕃人と』や鹿野の評伝も併せて翻訳した。戦時下のボルネオで消息を絶ったこの日本人に、楊先生が深い共感の気持ちを抱いていることは間違いない。

そうした鹿野とは対照的に、馬淵は原住民族に関する専門的な学術論文を書くことに徹した人物である。台北帝國大学の卒業生として知られるこの人類学者は、昭和期に台湾の山地と平地を縦横に踏査した経験を持ちながら、紀行文のような形で自身の調査活動に言及することを潔しとしなかった。学者は学術論文で勝負をする、という信念が一貫していたのである。楊先生は、大著『台湾高砂族系統所属の研究』を通して馬淵という先達に出会った、と述べている。同書は移川子之蔵、宮本延人との共著であるが、実際には本文全体の約3/4（75%）を馬淵が執筆したのだった。その分量は日文で何と60万字に近い。当時の馬淵がまだ二十歳代前半の年齢だったことも記憶されてよいだろう。

楊先生の訳註による中文版『台湾高砂族系統所属の研究』が間もなく出版される。その翻訳書が、原住民族研究への大きな貢献となることを期待したい。

3 原住民族の全体を見渡す

明治期の伊能、鳥居、森、そして、昭和期の鹿野、馬淵。

楊先生が多くの著作を翻訳したこれらの学者たちには、関心や研究姿勢の違いを超えて一つの顕著な共通点が認められる。五人とも、台湾各地で行った広汎な踏査の経験を拠り所にして、原住民族の全体を見渡すような概説的文章を書き、また族群の分布図を作成し

たのである。

伊能、鳥居、森が踏査した地域については、楊先生が「台湾調査時代」叢書に掲げたそれぞれの探検路線図に詳しい。初期の調査では、細かい研究資料の収集よりも、むしろ各地の原住民族に関して鳥瞰的な見取図を描くことに重点が置かれたと考えてよいだろう。楊先生の翻訳書では、例えば、鳥居「人類学研究・台湾原住民（一）序論」（『探險台湾』）、森「關於台湾蕃族」（『生蕃行脚』）などが原住民族の全体を見渡した概説である。

昭和期になると、一人の学者が台湾各地を隈なく踏破するという研究上の志向は薄れていった。厳密な学術論文を書くときには、研究対象の範囲を狭く絞った上で、主題を深く掘り下げることが多いからである。そうした中で、おそらく鹿野と馬淵ほど広く原住民族の居住地に足を運んだ人物は他に見当たらないであろう。しかもこの二人は、地域が限られたとはいえ、峻険な山地に点在する村々をよく知っていた。自身の調査経験を中心にして概説を書くことが十分に可能であった。楊先生の翻訳書では、『台湾百年曙光』に収録された鹿野「台湾原住民族之人類地理學研究序説」、馬淵「高砂族民族史」（第二次大戦後に執筆）などがそのような概説に当たる。

今日では、台湾の原住民族を紹介するための概説や分布図は、さまざまな書籍や雑誌はもとよりのこと、博物館の展示や各種のホームページなどにも掲載されている。全体を見渡すことに誰もが慣れているのである。ただし、過去に遡って考えてみればすぐに気がつくだろう。そうした概説や分布図が登場したのは、ここ百年余りの期間にすぎない。

日本の統治が始まる前まで、原住民族の人びと自身に、原住民族の全体を見渡すという発想や、その発想を裏付けるだけの知識が備わっていたとは考えにくい。原住民族の全体像は、外部から学者などが居住地を訪れ、実態調査を進めることによって徐々に明らかになっていった。上記の学者五人が書いた概説には、そうした調査の結果を簡潔明瞭な形式に整える上で重要な意義があったのである。

4 族群分類の提唱

原住民族の全体を見渡すという視点と関連してもう一つ、伊能など五人の学者たちが、それぞれ少しずつ見解の異なる族群分類（当時の用語では「種族」分類）を提唱したことも見落とせない。

明治期の学者のうち伊能と森は、族群の分類が原住民族の統治に役立つという認識をは

っきりと持っていた。台湾総督府の方でも、初期には伊能の分類案を採用し、1913（大正2）年頃になってから今度は公式見解を森の提唱した案に近い分類——すなわち、森の案にサイシャット（賽夏族）を付け加えた七分類——に切り替えた。それに対して鳥居の場合には、ほぼ純然たる学術的関心に基づいて自説を示したと考えてよい。東京帝國大学から現地調査に派遣された鳥居は、明らかに伊能や森とは学者としての立場が違っていた。

学術上の族群分類は、昭和期に入って移川・宮本・馬淵の共著『台湾高砂族系統所属の研究』、そして鹿野の論文「台湾原住民族の分類に對する一試案」でも示された。原住民族の調査に豊富な経験を有する鹿野と馬淵がそれらの提唱者になったのである。ただし、そうした学術上の分類が原住民族の統治行政と直接結びつくことはなかった。総督府が統治終了時まで採用していたのは、森の見解を一部修正した七族群分類であった。

第二次大戦後に、旧総督府の七分類ではなく、『台湾高砂族系統所属の研究』で提唱された九族群分類が強い影響力を持ったという事情はよく知られているだろう。2001（民國90）年以降に相次いだ族群の新規認定は、その九分類に対する異議申し立てと解することができる。日本統治時代の学者たちによる族群分類が今でも尾を引いているわけである。繰り返しになるが、楊先生の訳註による中文版『台湾高砂族系統所属の研究』が出版され、それが族群問題に関する今後の議論に裨益することを期待してやまない。

5 結語

楊先生は、数々の翻訳書や自身の著書などを世に送り出すことによって、原住民族に関する日本統治時代の研究と現代の研究との間に逞しい橋を架けた。まさしく他の追随を許さない業績である。そして、そうした一連の著述はただ学術研究に貢献したというだけではない。原住民族の人びとにとっても、それらは父母や祖父母、曾祖父母が生きた時代を知るための貴重な財産なると言えるであろう。

楊南郡先生の多大な功労を称賛したい。また、楊先生を顕彰する国立東華大学、および本研究会の開催に尽力したすべての方々に対しても、ここに敬意を表したいと思う。

参考文献

鹿野忠雄

1941 「台湾原住民族の分類に對する一試案」『民族学研究』第7巻1号

鹿野忠雄（楊南郡譯）

2000 『山、雲與蕃人——鹿野忠雄的台灣高山紀行』 玉山社

笠原政治編（楊南郡譯）

1995 『台灣原住民族映像——淺井惠倫教授攝影集』 南天書局

劉斌雄

1976 「日本學人之高山族研究」『中央研究院民族學研究所集刊』第40期

中藺英助（楊南郡譯）

1998 『鳥居龍藏——縱橫台灣與東亞的人類學先驅』 晨星出版社

移川子之藏・宮本延人・馬淵東一

1935 『台灣高砂族系統所屬の研究』 刀江書院

山崎柄根（楊南郡譯）

1998 『鹿野忠雄——縱橫台灣山林的博物學者』 晨星出版社

楊南郡

1996 『台灣百年前的足跡』 玉山社

2009 「在實地調查與譯註《台灣高砂族系統所屬之研究》遇見馬淵東一先生」『第二屆台日原住民族研究論壇——馬淵東一的學問與台灣原住民族研究』會議手冊、國立政治大學原住民族研究中心

楊南郡（譯註）

1996 『探險台灣——鳥居龍藏的台灣人類學之旅』 遠流出版

1996 『平埔族調查旅行——伊能嘉矩〈台灣通信〉選集』 遠流出版

1996 『台灣踏查日記』〈上册〉〈下册〉 遠流出版

2000 『生蕃行脚——森丑之助的台灣探險』 遠流出版

2002 『台灣百年花火——清末日初台灣探險踏查實錄』 玉山社

2005 『台灣百年曙光——學術開創時代調查實錄』 南天書局

楊南郡・徐如林

1993 『與子偕行』 晨星出版社

楊南郡（柳本通彥訳）

1994 「鹿野忠雄とトタイ・ブテン——早期台湾研究が結んだ友情」（與子偕行）『ふおるもさ』第5号（再録、2002 鹿野忠雄『山と雲と蕃人と——台湾高山紀行』文遊社）

2004 「どうしてケタガランなのか？」柳本通彦・他（編訳）『台湾原住民文学選 4

海よ山よ——十一民族作品集』草風館

楊南郡（梶山憲一・蔡易達訳）

2002 「台湾山岳文学の金字塔（台湾版訳者序）」鹿野忠雄『山と雲と蕃人と——台湾
高山紀行』文遊社

楊南郡（笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子編訳）

2005 『幻の人類学者 森丑之助——台湾原住民の研究に捧げた生涯』風響社

楊南郡老師與日本統治時期的學者群像*

笠原政治

日本橫濱國立大學名譽教授

壹、《台灣調查時代》——伊能嘉矩、鳥居龍藏、森丑之助

眾所周知，這十幾年來，楊南郡老師陸續地將日本統治時期關於台灣山地與原住民的紀錄、論文以及日本學者評傳等翻譯成中文，其於翻譯領域所下的功夫得到台灣學界崇高的評價。其中，至今依舊令人記憶猶新的是那套針對伊能嘉矩（Ino Kanori, 1867-1925）、鳥居龍藏（Torii Ryuzo, 1870-1953）以及森丑之助（Mori Ushinosuke, 1877-1926）等三位日本統治初期學者之著作所完成的譯著《台灣調查時代》叢書（共五冊），獲得了廣大的迴響。

從《台灣調查時代》叢書上標明的「楊南郡譯註」，我們不難了解這並非一般所謂的翻譯書。楊老師將伊能嘉矩、鳥居龍藏以及森丑之助三人命名為「學術探險家」，並於每本譯著卷首刊載經過嚴謹考證的人物誌、勘查足跡以及學術業績等。此外，無論譯文中詳盡標示的注解、探險調查路線圖、年譜及著作目錄等各方面，皆讓人體會到楊老師親自鑽研挖掘所得歷史事實數量之龐大。換言之，此套譯作乃基於楊老師獨創構思所編輯而成，每個構思皆以其譯註一一呈現。這套作品的充實解說與譯註之特點，於《台灣調查時代》叢書之後出版的《台灣百年花火》（2002）、《台灣百年曙光》（2005）亦可見。

這些獨具巧思的譯作，乃世人認識楊老師驚人實力的契機。其高度的日文解讀力，再加上透過登山、古道調查以及採訪原住民等功夫所培養的廣博知識，成為譯作整體極厚實的基礎。我們可以說，楊老師出色的譯註賦予了日本統治時期的這些古老紀錄與論文新的生命。

除了日本統治初期的調查紀錄，楊老師更著手翻譯 1930 年代的一系列作品。這

* 承蒙貴校邀請，讓我得於表揚楊南郡老師的研討會中發表報告，在此致上十二萬分的謝意。今天，謹讓我邊回想與楊老師多年深厚的情誼，邊針對主題略述己見。

本文由簡月真（東京大學研究員・國立東華大學副教授）、巫文嘉（東吳大學日本語文學系研究助理）敬譯。

個時期具代表性的學者中年輕一輩的有：鹿野忠雄（Kano Tadao, 1906-45）、馬淵東一（Mabuchi Toichi, 1909-88）等人。從日本的年號來看，楊老師的視野自「明治」橫跨「昭和」。

貳、鹿野忠雄與馬淵東一

日本統治時期的原住民研究，從實地調查的角度來看，可分為三大時期（參照表1）。第一期乃伊能嘉矩、鳥居龍藏以及森丑之助三人的「學術探險」期；第二期為臨時台灣舊慣調查會的活動時期；此外第三期則為台北帝國大學成立、各領域專家活躍的1930年代前後。此段研究史中值得注意的是，第二期與第三期之間將近二十年處於空白狀態；第一、二期的明治時期與第三期的昭和時期之間所出版的著作性質極不同。

表1、日本統治時期的原住民族調查

1896年～ （明治29年）	學術探險期之調查研究	伊能嘉矩、鳥居龍藏、 森丑之助、等
1909年前後 （明治42年）	臨時台灣舊慣調查會之調查	佐山融吉、小島由道、 等
（除了一小部分之外）調查研究處於空白狀態		
1928年～ （昭和3年）	（台北帝國大學創立） 大學等機構的學者所進行之調查	小川尚義、移川子之藏、 浅井惠倫、金闕丈夫、 古野清人、宮本延人、 鹿野忠雄 、岡田謙、 國分直一、 馬淵東一 、 等（依出生年順序）

相對於明治時期的鳥居龍藏與森丑之助等人樂於發表登山、探險等紀錄，昭和時期的學者之著作則多屬專業學術論文，無論調查或資料分析皆要求具學問上嚴謹的考察程序，於是「學術」與「探險」逐漸分離。楊老師於《台灣百年曙光》翻譯昭和時期著作時所挑選之作品，多為以描述為主的論文、調查報告及山地紀行文等。老師將山地跋涉與原住民調查緊密地結合，其所挑選之作品想必深獲讀者認同！

活躍於昭和時期的學者中，研究路線最接近鳥居龍藏與森丑之助者乃鹿野忠雄。鹿野忠雄於昆蟲採集、登山以及自然地理學調查之過程中，逐漸投入原住民研究，此段經歷，無可置疑地證明了其作學問的方法極具行動力。楊老師以優美的文筆精采地描述阿美族青年——托泰·布典與鹿野忠雄這兩位青年間的友情，該文（《與子偕行》）（楊南郡、徐如林，1993）使許多讀者深深著迷。此外，楊老師亦翻譯被喻為台灣高山文學經典鉅作的《山、雲與蕃人》以及鹿野忠雄評傳。想必楊老師對這位二次大戰在婆羅洲神秘失蹤的日本人深有同感吧！

相對於鹿野忠雄，馬淵東一則是徹底專注於書寫原住民專業學術論文的學者。這位畢業於台北帝國大學的知名人類學學者，昭和時期縱橫踏查台灣山地與平地，但其從未以紀行文形式介紹自身的調查活動紀錄。其堅持，學者就該以學術論文決勝負。楊老師曾說其透過大作《台灣高砂族系統所屬之研究》（1935）結識了馬淵東一這位優秀前輩。該書雖為馬淵東一與移川子之藏、宮本延人的共同著作，但實際上全書約有四分之三（75%）乃由馬淵東一執筆，其份量高達 60 萬字日文。值得矚目的是當時的馬淵東一年僅二十出頭！

楊老師譯註的中文版《台灣高砂族系統所屬之研究》即將付梓，此書之問世想必將為原住民研究帶來極大的貢獻。

叁、綜覽原住民族全貌

明治時期的伊能嘉矩、鳥居龍藏、森丑之助以及昭和時期的鹿野忠雄、馬淵東一等，楊老師翻譯的此些學者即使每個人的興趣與研究方針不同，但他們皆具有一個顯著的共同點。那就是，此五位學者皆以廣泛踏查台灣各地的經驗為基礎，撰寫綜覽原住民族全貌的概論性文章並繪製族群分布圖。

關於伊能嘉矩、鳥居龍藏、森丑之助踏查的區域，楊老師在《台灣調查時代》叢書繪製的探險路線圖提供我們詳細的資訊。我們也許可以說，早期的調查著重於描繪各地原住民族的鳥瞰式分布圖，而非詳細的研究資料蒐集。例如楊老師譯註作品中的鳥居龍藏〈人類學研究·台灣原住民（一）序論〉《探險台灣》（1996）、森丑之助〈關於台灣蕃族〉《生蕃行腳》（2000）等皆為綜覽原住民族全貌之概論性文章。

昭和時期之後，學者對於獨自一人四處勘查台灣各地的志趣漸薄弱。因為撰寫嚴謹的學術論文時，多聚焦研究範圍並深入鑽研探討該研究主題。像鹿野忠雄與馬淵東一般深入原住民部落的學者幾乎另無他人。此外，此兩位學者雖然侷限於部分區

域，但其對險峻山區中的部落瞭若指掌，所以他們能依個人調查經驗撰寫原住民族概況。楊老師的譯作中，《台灣百年曙光》（2005）所收錄的鹿野忠雄〈台灣原住民族之人類地理學研究序說〉、馬淵東一〈高砂族民族史〉（寫於第二次世界大戰後）等著作即屬概論性質。

現今，介紹台灣原住民的概論與分布圖，不僅可見於各式各樣的書籍、雜誌，亦刊登於博物館的展覽及各種網頁等媒體。我們皆習於綜覽原住民全貌，不過，只要將時間回溯便能了解：此類概論與分布圖之誕生，只不過是這近百年內的事啊！

在日本統治台灣之前，原住民族本身應該沒有綜覽整體原住民族的想法以及支撐此想法的知識。原住民族的整體面貌，乃藉由外來的學者等訪查部落並進行實地調查後而漸清楚。上述五位學者所撰寫的概論，簡潔明瞭地整理其調查結果，是極具意義之著作。

肆、族群分類之提倡

關於綜覽原住民全貌觀點中，有一項不容忽視的是：伊能嘉矩等五位學者皆分別提倡見解各異的族群分類（當時的用語為「種族」分類）。

明治時期的學者中，伊能嘉矩與森丑之助明確地認知族群分類有助於治理原住民。台灣總督府初期採用伊能嘉矩的分類法，但 1913（大正 2）年左右官方則改採較類似森丑之助的分類——亦即，森丑之助的分類加上賽夏族，共七族。相對地，鳥居龍藏則可謂單純地以學術觀點闡述其自身學說。東京帝國大學派遣來台從事調查的鳥居龍藏之立場很明顯地異於伊能嘉矩與森丑之助。

關於學術上的族群分類，昭和時期則可見於移川子之藏、宮本延人以及馬淵東一共著的《台灣高砂族系統所屬之研究》（1935）、鹿野忠雄的論文〈試論台灣原住民族分類〉。原住民族調查經驗豐富的鹿野忠雄與馬淵東一分別提出不同看法，不過，其兩人之學術分類並未與原住民族治理行政連結。直至統治結束，台灣總督府所採用的族群分類仍為修正森丑之助見解後的七族分類。

第二次世界大戰後，《台灣高砂族系統所屬之研究》提倡的九族分類影響力遠超過舊總督府的七族分類。2001（民國 90）年後陸續產生的新族群認定，可謂對此九族分類之異議表現。換言之，日治時期學者的族群分類，至今仍具影響力。最後，請容我再次重覆，我衷心地期待楊老師譯註的中文版《台灣高砂族系統所屬之研究》之出版，能對今後族群相關議題之探討大有裨益。

伍、結語

楊老師藉由無數的譯著及其自身著作為日本統治時期的原住民研究與現代原住民研究之間，建構了堅實的橋樑，此可謂讓眾人瞠乎其後之成就。這一系列的著書除了學術貢獻外，對族人而言，更是其了解父母、祖父母以及曾祖父母輩的年代之貴重財產！

最後，我打從心底讚譽楊南郡老師的偉大功勞，並對表彰楊老師功績的國立東華大學以及對本研討會盡心盡力的工作人員們，致上我最高的敬意。

參考文獻

- 移川子之藏、宮本延人、馬淵東一。1935。《台灣高砂族系統所屬の研究》。東京：刀江書院。
- 鳥居龍藏（楊南郡譯註）1996。《探險台灣——鳥居龍藏的台灣人類學之旅》。台北：遠流出版。
- 鹿野忠雄（楊南郡譯）。2000。《山、雲與蕃人——鹿野忠雄的台灣高山紀行》。台北：玉山社。
- 森丑之助。（楊南郡譯註）。2000。《生蕃行脚——森丑之助的台灣探險》。台北：遠流出版。
- 楊南郡、徐如林。1993。《與子偕行》。台中：晨星出版社。
- 楊南郡。2002。《台灣百年花火——清末日初台灣探險踏查實錄》。台北：玉山社。
- 楊南郡。2009。〈在實地調查與譯註《台灣高砂族系統所屬之研究》遇見馬淵東一先生〉發表於國立政治大學原住民族研究中心主辦「第二屆台日原住民族研究論壇——馬淵東一的學問與台灣原住民族研究」。台北：國立政治大學。8月26-28日。
- 楊南郡。2005。《台灣百年曙光——學術開創時代調查實錄》。台北：南天書局。

簡月真（東京大學研究員・國立東華大學副教授）

巫文嘉（東吳大學日本語文學系研究助理）

敬譯